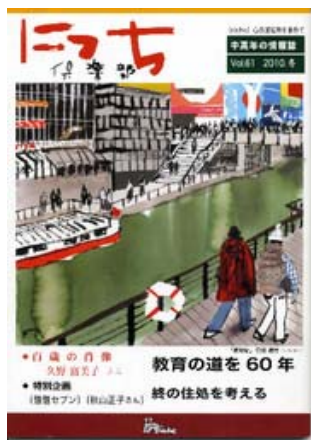


被災高齢者に元気届けて12年 芦屋の生活情報誌

2011年1月24日



久野幸子編集長(中央)ら編集部メンバーは毎週金曜日に集まり、新コーナーの企画などを話し合う＝芦屋市宮塚町



中高年向け情報誌「にっち」の最新号。発行は約3千部で、読者は北海道から九州までという

芦屋市で1999年に創刊された中高年向けの生活情報誌がある。阪神大震災で被災した高齢者を励まそうと地元の女性たちが作った。地域で活躍するお年寄り取材したり、病気や税金などの生活情報を載せたり。「元気になって」という思いを今も紡ぎ続けている。

生活情報誌「にっち」の編集方針は、「隣の元気な先輩から話を聞く」。主に70歳以上の読者を意識して内容を考えている。元気な100歳以上の先輩を取り上げるコーナーや、著名人のインタビューもある。

創刊時からの編集長は芦屋市在住の久野幸子さん(64)。95年の震災時、近所に住んでいた母の藤井都実子さん(当時74)の木造戸建て住宅の柱が傾いた。けがはなかったが、母の生活は一変した。長年通った料理教室の親友を亡くし、業者に言われるがまま、自宅の簡単な修復工事に1千万円近くを支払っていた。口数が次第に減り、得意だった料理も粗雑になった。

しばらくして、久野さんは知人から「被災した高齢者が元気を無くしている。何か読む本でも作ってくれへん」と持ちかけられた。母のことも思い、被災した人たちを励ますものを作ろうと決心した。

知人女性ら6人で10万円ずつ出し合い、99年に「にっち」を創刊。名前は「適した場所」を意味する英語の「niche」からとった。年4回、約3千部ずつを発行し、書店などで販売している。

震災から10年たった05年の号で、避難所で夫を亡くした人や、両親を含む家族全員が家の下敷きになった人らの悲しみが赤裸々に語られたことがある。同年に母の都実さんががんで亡くなった。久野さんは母の被災後の様子を思い出すにつけ、「日頃は気丈に見えるが、実は寂しい思いをしている人がまだまだいる」と思う。

現在、編集部メンバーは久野さんを含め9人。2年前に40代の2人が加わった。久野さんは「元気づけようとしたお年寄りの年齢に自分たちも近づいている。若い人たちに気持ちをバトンタッチできたら」。

一冊約80ページで、500円(税込み)。出版費用は購読料や賛助金などで支えられている。問い合わせはNPO法人「にっち倶楽部」(0797・35・5160)へ。(五十嵐聖士郎)